

なくなる傾向にある。続く前期後半～中期前半は、竪穴住居形態が方形を基調とするように住居形態が大きく変化し、9区中央、8区中央、1次Cトレ、7区南、1次Dトレに竪穴住居跡が点在すると同時に、その数も大幅に減少する。この後、古墳時代後期後半まで集落が一旦断絶する。この要因としては、本遺跡北東に位置する全長55mの藤ノ尾車塚古墳の築造が大きく影響したことを指摘しておきたい。

#### 古墳時代後期後半～奈良時代

古墳時代後期後半には7区中央～南にカマド付竪穴住居が形成され、後期末には7区中央～6区、1次Dトレという遺跡南側で集落が展開する。一方8・9区は安ノ内古墳の存在からおそらく横穴式石室を主体とする円墳が群をなしており、南の小規模な集落と北の墓域がセットとなる集落景観であったと想定される。本遺跡は7世紀前半の1次Dトレ6号住居跡を最後に集落の形成が終了し、8世紀後半の9区中央の複数の溝は規模と形態から田などの耕作に関連する溝と推測されることから、その後この地は田んぼを中心とする耕作地になったと考えられる。

## 2 藤の尾垣添遺跡及び周辺遺跡出土甕棺の地域性

### a. はじめに

本遺跡では1で先述したように、橋口編年（橋口1985）南筑後K I a式～K II a式の甕棺墓が1・2次調査総計で87基検出された。また、近年の九州新幹線建設等による発掘調査の進展により、みやま市域ではK I・II式を中心とする甕棺墓が多く発見されている。例えば、本遺跡とは返済川を挟んだ北側に位置する小川柳ノ内遺跡（進村2007など）では、南筑後K I a～K II a式、K IV式の甕棺墓58基、本遺跡から約3.5km南の竹飯犬ノ馬場遺跡（猿渡2007）では南筑後K I b～K II c式の甕棺墓13基、他では山門前田遺跡や山門北池遺跡、海津横馬場遺跡でも少数ながら確認されている。

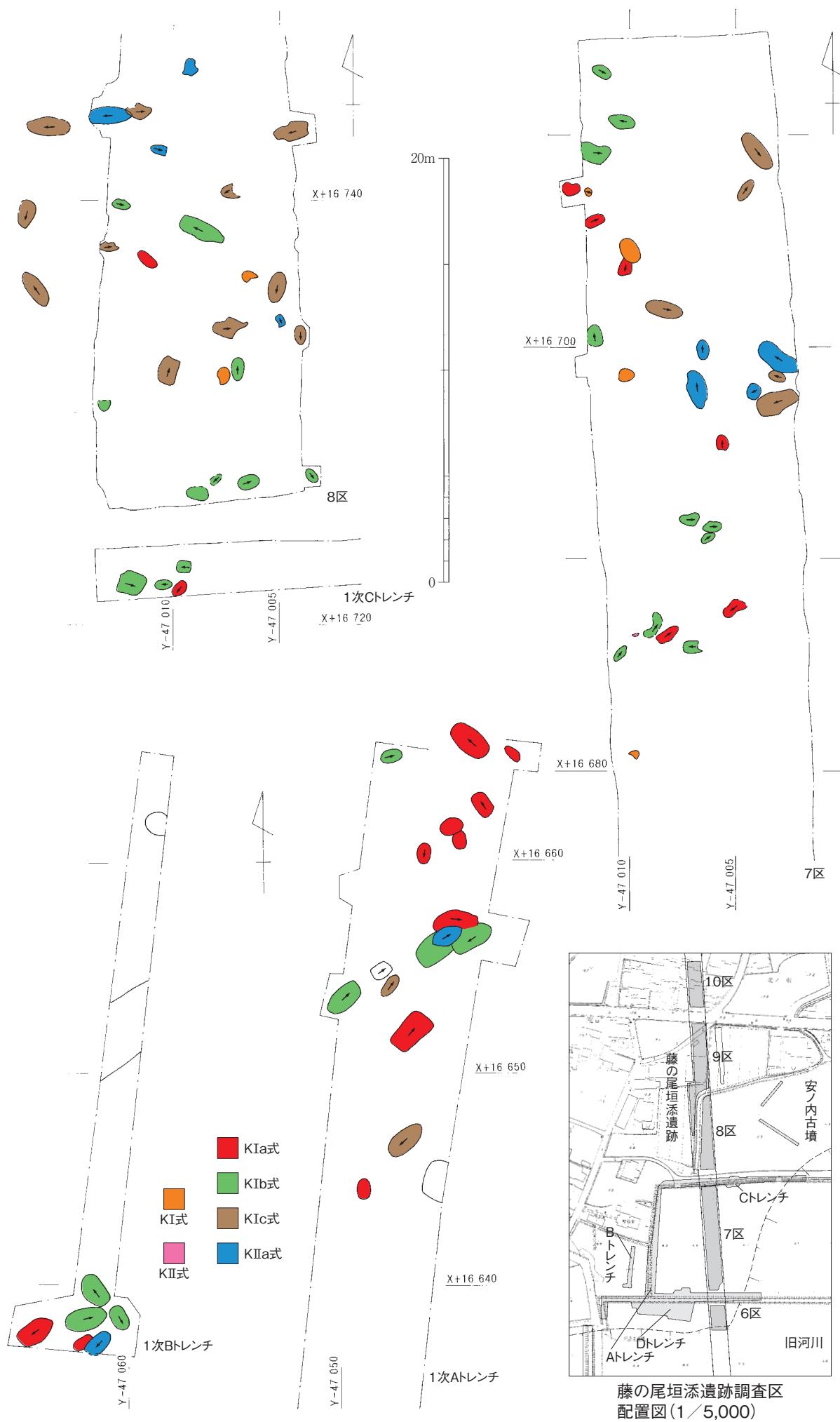
このように、橋口氏が編年を発表した当時と比べるとかなり資料の蓄積が進んでいるものの、本地域の甕棺の編年については、橋口氏が整理した区分及び変遷案は現在でも問題がないが、本地域の特徴的な甕棺については、資料の増加により若干検討できうる。

そこで、ここでは橋口氏が提示した甕棺の地域的特徴に付け加える形で、南筑後K I a～K II a式期を対象に、本地域における甕棺の特徴について、簡単ながら検討することとした。

### b. 地域的特徴のある甕棺の検討

先述したように、本地域の甕棺の編年及び地域的特徴については、橋口達也氏による一連の論考（橋口1979・橋口1985・橋口1993など）によって詳しく論じられている。橋口氏が論じた南筑後K I a～K II a式期の甕棺の特徴を抜粋すると、①筑前・筑後・肥前の三国境付近で成立した三角口縁を呈する甕棺を源流として成立、②器壁が厚く、底部は5cmほどと分厚い、③三沢周辺あるいは久留米付近から搬入されたと思われる甕棺の存在、④外面をミガキ風に仕上げる手法が残存するなどを特徴としてまとめている。現在でも橋口氏が提示したこれらの特徴は、本地域の甕棺の地域性を示す基本的なものである。

①については、本遺跡でも南筑後K I a式のものが出土し（第159図中の中）、その後口縁



第 158 図 藤の尾垣添遺跡甕棺墓群変遷図 (1/250)

部が内及び外に突出し、繊細となる流れで、三角口縁の系譜がK II a式期まで認められる（第159図中の下）。また、肥後地域の黒髪式三・四式土器や本地域の小形棺に転用された日常土器の甕に認められる、蓋受け状に口縁部上面を窪ませ、口縁外端部をつまみ出すような形態の口縁部を持つ甕棺（第159図中の上）や黒髪II b式の甕を上下棺とした竹飯犬ノ馬場遺跡K10（第159図右の中）は、地理的に隣接する本地域と肥後地域との関連や両者の時期的な併行関係を考える上で重要な資料となる。

### 丸味を帯びた大形棺の系列

南筑後K I b～K II a式における丸味を帯びた中形棺の系列の存在は既に橋口氏により論じられているが（橋口1985）、その系列とは異なる、大形棺で丸味を帯びた甕棺の系列が新たに確認できた（第159図左）。まずこの系列の初期段階のものである、小川柳ノ内遺跡3区K22下甕は内傾する口縁部は外側への突出が非常に弱く未発達なもので、胴部下位の三角口縁も低平なものである。K 22下甕よりは後出するが同じ南筑後K I a式の範疇で捉えられる松延遺跡K 3北甕は、口縁部はK22下甕と比べて字状に外側に発達しているものの、より胴部は丸味を帯び、口縁部は著しく内傾する。加えて胴部突帶はなく、底部厚は4.5cmとこの地域・時期の甕棺にしては薄い。続く南筑後K II b式の松延遺跡K 3南甕は胴部の丸味は少くなり、口縁部は逆L字状に外側に発達し、内傾度も弱くなる。K 3北甕と同じく胴部突帶はなく、底径9cmと小さく、底部厚4cmと薄い。なお、本例は外面に横沈線・放射状の文様及び竪穴住居状の文様を施したものである。次の南筑後K I c式のものは確認されていないものの、この系列は中形棺となるが、K II a式の本遺跡8区K42に系譜が繋がると考えられる。

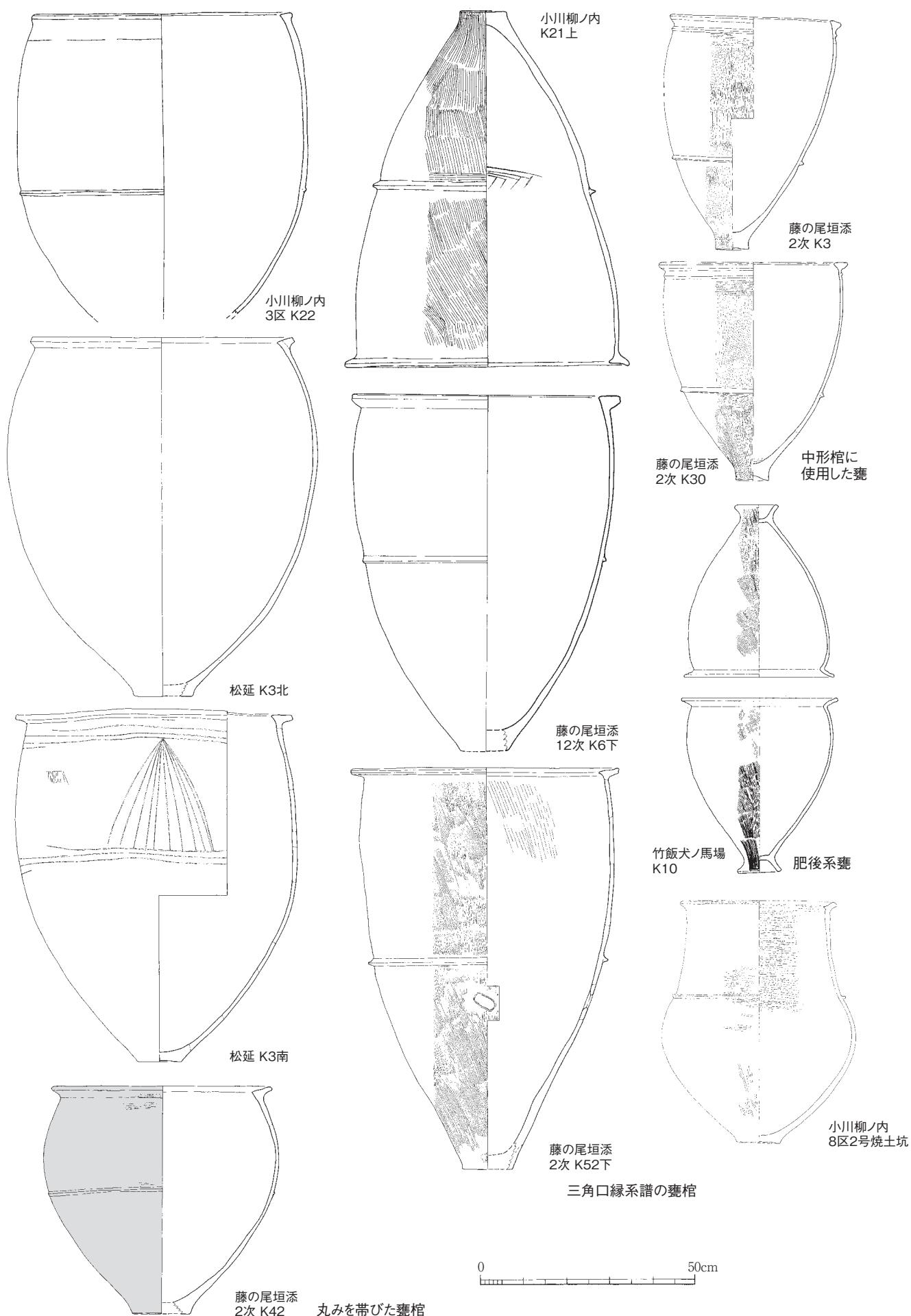
胴部突帶を持つ丸味を帯びた大形棺は、本遺跡1次K 6下甕（第159図中の中）・K 10上下甕・K 15下甕・K 18上甕、今福貝塚出土甕棺上・下甕など、本地域の南筑後K I a～K I b式期の甕棺に散見される。この系譜はハサコ宮遺跡K 8上（橋口1978より）などの存在から、三角口縁の甕棺とともに筑後地域から本地域にもたらされたものである可能性が高い。

### 中形棺専用として作られた特徴的な甕棺

本遺跡や小川柳ノ内遺跡、竹飯犬ノ馬場遺跡では、主に单棺で用いられた棺専用の中形甕が存在する（第159図右上）。この中形棺は口径が40～45cm前後、器高が50～55cm前後を測り、胴部は丸味を帯びた砲弾状で、底部は厚底・上げ底、外面のハケはそのままでナデ消しておらず、最大の特徴として胴部下位に三角突帶を巡らすことである。橋口氏は甕棺専用として作られたものは小形品であっても胴部突帶を付すとしており（橋口1993）、この中形棺も棺専用として作られたと考えられる。この専用中形棺は南筑後K I a式には既に成立しており、本遺跡K 14下甕例のように南筑後K II a式まで認められる。

### 本地域における大形棺成立以前の墓制について（予察）

本地域における弥生時代前期の墓制は、山ノ上遺跡で早期～前期前半の壺+突帶文甕の甕棺墓が確認されている以外は不明である。しかし、本遺跡や山門前田遺跡、小川柳ノ内遺跡5区で弥生時代前期前半～末の遺構・遺物を発見していることから、本遺跡周辺でも将来的には弥生時代前期の墓地が発見される可能性が高い。本地域の弥生時代前期墓制を予察させるものとしては、小川柳ノ内遺跡8区2号焼土坑出土の大形壺（第159図右の下）がある。この壺は共伴土器から弥生時代中期初頭古段階で、容量的にも小児棺として用いられても問題がないもの



第159図 本地域における特徴的な甕棺 (1/12)

である。このことから、本地域の弥生時代前期の墓制は小児用は壺を用いたものであった可能性があり、成人用は土壙墓ないしは木棺墓であった可能性がある。今後の調査の進展に期待したい。

## 参考・引用文献

- 橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 中巻 福岡県教育委員会  
橋口達也 1985「V南筑後における甕棺の編年」『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会  
田中康信編 1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第4集 瀬高町教育委員会  
橋口達也 1993「甕棺—製作技術を中心としてみた諸問題—」『考古学研究』40巻3号 考古学研究会  
中園聰 2004『九州弥生文化の特質』 九州大学出版会  
進村真之 2007『小川柳ノ内遺跡Ⅰ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会  
猿渡真弓 2007『竹飯地区遺跡 竹飯堺遺跡 竹飯犬ノ馬場遺跡』高田町文化財調査報告書第10集 高田町教育委員会

## 3 藤の尾垣添遺跡周辺の竪穴住居の構造

－弥生時代後期～古墳時代中期前半事例の検討－

### a. はじめに

1の本遺跡集落の変遷で検討したように、本遺跡では弥生時代後期～古墳時代中期前半に属する竪穴住居跡が約90棟検出されている。本遺跡の発掘調査範囲は、1次調査は排水路部分、2次調査は新幹線路線という非常に狭長な調査区であったため、竪穴住居の全形を知りえたものは少ない。しかし、『藤の尾垣添遺跡Ⅰ・Ⅱ』の中で、本遺跡内において竪穴住居跡の平面形が長方形から方形に変化する過程を読み取れることを指摘した。そこで、ここでは本遺跡を含むみやま市内で検出された弥生時代後期～古墳時代中期前半の竪穴住居の変遷を検討してみたい。

### b. 竪穴住居の分析方法

本稿対象時期における北部九州の竪穴住居については、寺井誠氏による優れた先行研究があり（寺井 1995）、本稿でも他地域の事例と比較することで、本地域の位置づけを明らかにするために、寺井氏の分析手法に則って行うこととした。

寺井氏は分析対象とする竪穴住居の条件として、「全掘もしくはそれに準ずる程度に調査され、全貌を知ることができるもの」とするが、本稿では時期や主柱穴が明確でない竪穴住居跡も参考資料として第160図の一覧表に掲載した。この第160図では寺井氏による集成に倣い、平面形・主柱穴数・法量（長軸・短軸）・面積・長短比・ベッド状遺構型式の順に表を作成した。このうち、ベッド状遺構の型式については、第161図左下の寺井氏の分類によるが、図だけでは少し分かりにくいので簡単に説明すると、A類は壁隅、B類は短辺の1辺、C類は短辺の一辺と壁隅、D類は両短辺、E類は3方、F類は4方に付設するもので、N類はベッド状遺構のないものとしている。なお、本地域対象遺跡は沖積地や微高地上に立地するが多く、本遺跡でも竪穴住居跡下層に弥生時代中期の甕棺墓や弥生時代前期の土坑などがあることが多く、ベッド状遺構を誤って掘り失ったものもある。このような遺跡条件により、ベッド状遺構に気づかず、住居竪穴部だけを1棟の住居とした事例も存在する可能性が高く、本地域ではN類が